ミリファとヴァデッド

立瀬香佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミリファとヴァデッド

【Ｎコード】
Ｎ０８９８Ｘ

【作者名】
立瀬香佑

【あらすじ】
『ここで死ぬか、生きてあたしのモノになるか。・・・どっちがいい？』『・・・両方却下っていう隠し選択肢はない訳？』
瀕死状態を助けてもらったことをきっかけに、使い魔になったヴァデッドとそのご主人・魔女ミリファのお話。
＊短編連作のような形の予定です。

はじまりはじまり

『ここで死ぬか、生きてあたしのモノになるか。・・・どっちがいい？』

自分の腕ににじむ血の赤よりも、ずっと鮮烈な赤の瞳が俺をじぃっと見定めるように見つめて言った。その手はゆるくウエーブがかかっている漆黒の髪をいじっている。

『・・・両方却下っていう隠し選択肢はない訳？』

そう言うと、彼女は俺の頭を本気の全力ではたいてきやがった。俺、生死さまよってたんですけど。

俺はいわゆる、人間から言うところの妖精とか悪魔とか、そういう奴らの付近にいる生き物だ。どちらかといえば悪魔に近いかもしれない。魔力を持っているから魔法だって使える。

そして、多くのそういう生き物達と同じように、俺にとって“契約”というものはひどく重要な位置に置かれている。一度結んでしまえば、必ずそれを遂行しなければならない。もし契約不履行だなんてことになったら、反動で著しく力を奪われる。

俺が今、こうやって生死さまよってたりするのも、そのせいだったりする。あー今思い出しても腹が立つ。

俺の今回の契約者は、見目麗しい男だった。なんでも、親友に彼女を寝取られてしまったらしい。よくある話だった。そいつの望みはそいつらの仲を引き裂くこと。報酬はそいつの生気・・・寿命１０年ほど。

比較的楽な仕事だったんだ。案の定、そいつらの仲は俺の力ですぐに悪くなった。もうすぐでそいつらは別れて、俺は契約者の男の生気をいただけるはずだった。…なのに。

契約者の男は、他の女が好きになってしまったのだ。

契約者の男にはもう親友と元彼女の仲を引き裂く理由などなく、むしろその好きになった女とともに歩むための寿命が惜しくなったのだ。

そいつは俺と契約したにも関わらず、親友と元彼女との仲をとりもちやがったのだ。もともと契約者の男に罪悪感を少なからず持っていた二人は、その男に認められたことに安堵し仲の良さを復活させた。腹立たしい。俺も必死で妨害したが、どうにもならずに契約不履行。その反動が跳ね返ってきて、俺はズタボロになってしまった。たまたま新月が近づいて魔力が低くなってきてるっていう時に、俺はなんて運のないヤツなんだろう。普段ならこの程度の反動でここまでズタボロになることなんてないのに。

そんなこんなでじっと傷が癒えるを待っていたら次はこの女だ。
俺はほとほと運がない。

「おー！なっかなか色つやよくなってきたんじゃないのー？」
「・・・お前、か」

ニコニコしながら、俺の前に現れたのはあの女だった。名前はミリファで、なんと魔女らしい。道理で思いっきり人外の俺を見ても動じないはずだ。『あたしのモノになる？』っていうのも、文字通り彼女に忠誠を誓って使い魔になれということだったらしい。

「ここまで復活したの、誰のおかげだと思ってるの？」

俺の髪を、自分の髪にそうするようにくるくると指にからめた。

「誰も頼んでない」
「うっわーかっわいくないのー」
「俺に可愛さを求めるな。お前だって下心があって俺に施しをしているんだろう？」
「うん」

にっこり笑ってあっさり認めやがった。

「あたし、あなたが欲しいんだもの。結構上級みたいだし」
「俺がイエスと言わなきゃ契約は成立しないぜ？」
「ん？そん時は無理やり策略でもなんでもねって契約成立まで持ち込むよ。これでもあたし、魔女さんですからね」

ふふん、とない胸をそらせてミリファは自信満々にのたまった。はっ、と鼻で笑ってやるとぷぅと頬を膨らませた。

「何で私との契約が嫌なのよ？」
「使い魔になるのが嫌だからに決まってるだろ」

人に使われるなんて、冗談じゃない。使い魔ってやつは、主人に絶対服従。忠誠を誓わなければならない。そんな不自由な生活まっぴらだ。

「むむ・・それじゃやっぱり弱ってるうちに無理やりやっとけばよかったなぁ・・・」
「今の俺に無理やり契約だなんて無理だぞ？」

癪だが、こいつのおかげでかなり回復したし、魔力も戻ってきた。いくらこいつが魔女でも、無理やり俺を使い魔にすることなんてできないだろう。そう言ってやると、ミリファは悔しそうな顔をした。

「うー。でもやっぱり欲しいなぁあなたが。きらきら銀髪の長い髪に、青い瞳の魔物さんー！」
「・・・なんで俺にそこまで拘るんだよ」

あんまりにも、悔しそうにするものだから、俺は思わず顔をしかめて尋ねた。

「え、一目ぼれ？」
「は」
「初めて見た時、ビビッってきたの」
満面の笑みを浮かべながら、ミリファはきゅっと俺の片手を両手で包み込んだ。
「・・・」
あ、呆れてモノが言えないってこういうことを言うのか・・・・・。
「だからあたしのモノになろう！魔物さん！」
目をキラキラさせながら言うな。
「俺がお前の使い魔になって何のメリットもないと思うんだが。それに俺はお前に従う気はない」
「絶対服従なんてしなくてもいい！ってことかなぁ。別に何でもかんでも言うこと聞いてくれなくていいよ」
「・・・じゃあ、お前は使い魔に何を望むんだ？」
大抵のやつは、便利な道具、もしくは仲間として使い魔を望む。仲間として望んだとしても、使い魔は圧倒的に地位が下だ。従わなければ、消滅させられてしまう。
「あなた」
何のてらいもなく、俺の目をまっすぐ見つめて、ミリファはそう

言った。

「あたしは、あなたが欲しいの」

燃えさかる炎のように赤い瞳が、俺の青い瞳をしっかりと捕らえた。どくりと何かが脈打った。

「魔物さんを手に入れるんなら、使い魔になってもらうのが一番てっとり早いと思って」

・・・おい。

俺はハァ、と息を漏らした。

「・・・ヴァデッド」

「え？」

「俺の名前はヴァデッドだ」

硬直しているミリファの手を俺はとった。無理もない。名前を知られるというのは、命をにぎられたも同然のことだから。

俺は今確かに、こいつに命を預けた。

「いいぜ、お前のモノになってやる」

その手の甲に唇を這わせた。少しでも歯に力を込めれば噛み切ってしまえそうな、小さく華奢な手だ。

なんか頼りがいも何もないようなお前だけど、俺をその気にさせたことだけは認めてやるよ。

だから契約してやる。お前のモノに、なってやるよ。

「・・ヴァデッド・・・」

おずおず、という風にミリファ・・・マスターがそう呼んだ。

「マスター、何用ですか？」

俺がそう言うと顔を思いっきりしかめた。

「ミリファでいいし、タメ口でいいから」

その顔と口調が、思いっきり拗ねたみたいなもので、俺は吹き出してしまった。使い魔に対等を望むか？普通。

「やっと手に入れた。あたしだけの魔物さんなんだからっ」

いきなり抱きついてきて、俺の銀の髪に顔を埋めたミリファの体を両腕で受け止めた。

はじまりはじまり（後書き）

初投稿になります。
じゃじゃ馬な女の子と人外の青年のお話です。

「・・・」

俺は眉間に思いっきり皺を寄せた。

耳元でスースーという規則正しい呼吸音がしている。目線をちらりと斜め左下に動かすと、漆黒のウエーブヘアーと、白い肌がやっぱり居座っている。安心しきった顔して、俺の左上半身に体を預けてすやすや眠っているのが何を隠そう、俺のマスター・・・・ミリファだ。

先程、『ねむいー』と言いながら魔術書を読んでいる俺のところにきたかと思ったら、さもそれが当たり前かのように俺の膝上に陣取ると・・・・、まぁ・・・・このように寝息を立て始めたというわけだ・・・。

まず、いつも思うが何故こいつは俺の上に乗るんだ。俺はこいつの座椅子でもソファーでもベッドでもなんでもないんだぞ。こいつそこんとこわかってんのか？わかってるって言いそうだけど本当にちゃんとわかってんのか！？理由を聞いてみてもよくわからない言い分聞かされて、結局こっちが折れる始末。つかめねぇ。つかめねぇにも程がある。

じっ、と俺はミリファの顔を見た。白くて、すっきりとしているというよりは全体的に丸みを帯びた顔。二つの瞼の中には炎のように真っ赤な瞳が居座っている。俺とは、正反対の色。

触れようと思って手を伸ばしたら、指よりも先に爪先がミリファの頬にあたってしまい、思わず顔をしかめた。

やっぱりこの長く鋭い爪はどうにかしないと危ない。出し入れ自由とかいうモンでもないから、やっぱりつんでしまうしかないんだろうな。一つ武器が減るが、まぁたいしたことはないだろう。
頬にあたったままの爪先を、顔にかかっているミリファの黒髪にくるくるとからめた。よくミリファが俺の髪でやる仕草だ。本人は『真っ直ぐストレートがよかった・・！これ大変なんだよ朝とかー湿気とか多いとほんと最悪なんだ』って言うけれど、ミリファにはストレートよりこっちの方が似合ってる気がする。ヒトのいうこと聞かないとこなんかミリファそっくりじゃねぇか。

「・・・」

ふあ、と俺は大きく欠伸をした。何だか俺まで眠たくなってきた・・・。
首を少し下に傾けると、ふわりと鼻腔をミリファの香りがくすぐった。日がな魔術書を読んだり、薬草を煎じたりしているミリファは、太陽の下に出てる時間よりも部屋の中にいることが多い。なのに、何でこいつはお日様の匂いがするんだろう？しかも妙に暖かくて、その体温が心地いい。
俺は眠っている間に落としてしまわないように、左腕をミリファの腰に回して、そのまま意識を手放した。

「・・・！！」

あたしはギャーーーと叫びだしそうになるのを両手で自分の口を塞ぐことで何とか防いだ。

目を覚ましてみると、目の前には涼やかな寝顔。びっくりしないわけがないじゃないですか。乙女的に。

「・・ヴァデッド・・・？」

おずおずとその涼やかな顔の持ち主さんの名前を呼んでみる。反応ナシ。ほんとーに寝ちゃってるみたい。

珍しいなあ、ヴァデッドがこんな風に寝てるのって。いつもあたしより先に起きてるし、あたしより後に寝てる。睡眠時間何時間ですかーって感じ。

・・・それにしても。

・・・なんで男の人なのにこんなに寝顔綺麗なのかなぁ・・！！神様ってやつはとっても理不尽だっ・・！！！

スッとした目元に、綺麗な曲線を描いた眉。鼻筋はスッと通ってるし、唇は薄い。顎はシャープなラインを形作ってる。いつもある眉間の皺がない分余計に綺麗に見えるわ・・・・。眉間の皺って、やっぱりすごい影響力があるんだわ、うん。

寝顔見れたのもラッキーって感じだけど、やっぱりあの青の双眸

がこっちを見てないのは惜しい気がする。あたしとは正反対のどこまでも澄んだ、でも吸い込まれちゃいそうなくらい深い青。

サラサラの銀髪。ものすごくうらやましい。手触りも最高すぎる。わけてほしい。せめて髪質だけでもわけてほしい。ヴァデッドは『今のそれが何でそんなに不満なんだ』ってバカにしたみたいに言うけれど、くせっ毛って本当に大変なんだからっ。

肌に指を添えてみる。うっわー・・・すべすべー・・・・ほんと、何でこの人は全世界の女子が羨むものを全て持ってらっしゃるんですかね！？

「・・・・ん・・・・」

「！！！」

声がして思わずあたしは手を離した。心臓がバクバクと暴れまわる。ひいいいいいい！すいません変態行為してすいませんっ！

「・・・・」

・・・お、起きて・・・・・な、い・・・・・？あああ、びっくりしたあああ。

はあ、と一息ついて呼吸を落ち着かせる。

ああ・・・もう、起きて何かしよう。特に何にも思いつかないけど何かしよう。

そう思って体を起こそうとすると、腰の辺りに何かがあるのに気づいた。・・・ヴァデッドの腕が、しっかりと腰に回されていた。あたしはヴァデッドの顔を見上げた。・・・・落ちないように、支

えてくれていたのかな・・・・？

あたしはまた、体をヴァデッドに預けた。あたしの一番休まる場所だ。下手をするとベッドやお風呂よりもこの位置の方が心地よくて安心する。

ヴァデッドはいつも『俺を座椅子かなんかと勘違いしてんじゃねーの』と言うけれど、あたしはいつだって確かめたいだけだもん。『ヴァデッドはあたしだけの使い魔』で、『ヴァデッドは確かにここにいて』、『この場所はあたしだけの特等席』だって。

・・・独り占めしたいの。何とか口説き落として手に入れた最高級の使い魔さんを。

・・だって。ヴァデッドは知らないんだもん！っていうか自覚ないんだもん！

自分が結構なんだかんだ言っても優しいところとか、そういうのが周りの女の子達にはすんばらしく見えることとかっ。この前だって、あたし一人で町にお買い物いけるからお留守番しててって言ったのに、『ついていく』って言って聞かなくて！それで何でついてきたのかと思ったら荷物持ちとボディーガードのためだったっぽいし（何故か理由を聞いてみても教えてくれなかったから想像だけど）！しっかり人ごみから守ってくれちゃったりして・・・・

ただでさえ見た目いいのに町にいた女の子達にどれだけ自分が注目されてたと思ってるんだろっ・・・！！そんなに女の子から人気者になってどうするつもりなのか問いただしてやりたいっ。

中には、『あの子がマスター？絶対勝てる』だなんてあたしにだけ聞こえるように呟いていった子とかいるんだから・・。

やだやだっ！絶対ヴァデッドはあげないんだから！！！あたしのなんだから！！！

あたしはぎゅっと目を強くつむった。

「・・・ミリファ・・・・？」

耳元で低い掠れた声が落ちた。甘さに体がぴくりと震えた。

「・・・あ・・・あたし・・起こし、ちゃった・・・？」

おずおずと目を開けると至近距離に青の双眸があった。

「・・？お前寝てたんじゃなかったのか・・？」

ヴァデッドはそう言いながら首をおこした。だるそうに首を左右に動かしている。

「いや、ちょっと前に起きました。んでちょっとまどろみタイム？」

「まどろみタイムの人間が眉間に皺よせんのか。器用だな」

うっ見られてた。

「変な夢で見たのか？」
「ううん！何でもない！」

ミリファは俺の目を見ずに言った。こいつは俺に嘘をつくのがへたくそだ。絶対に目を合わせないからすぐにわかる。

「ミリファ」

声を強めてやると肩が震えた。やましいことがある証拠だ。

「・・ヴァデッド・・」
「何だ」

「あなたは、あたしの使い魔だよね？」

紅蓮の瞳が俺の瞳を真っ直ぐ射抜く。本気の視線だ。こいつの瞳には、本気がよく似合う。

「・・当たり前だろ。俺が誰と契約したと思ってるんだ」
「あたし」
「だろ」

それでもちょっと不服そうな顔をミリファはしていた。

「・・・お前、まさかとは思うが・・・・、『あの子がマスター？絶対勝てる』なんて戯言本気にしてるんじゃ・・・」

俺がそう言うと、ミリファは目を瞠った。・・・マジかよ。

「何！ヴァデッドあれ聞こえてたの！？」

「俺は耳聡いんだ」

「地獄耳の間違いじゃ・・・」

「お前にだけは言われたくない。そもそも人間と俺の聴力比べる方がバカげてるだろ」

はあ、と俺はため息をついた。

「俺はあんな女ごめんだ」

「・・綺麗だったよ？」

「見た目はな」

俺はあんなせっこいみみっちい真似するような女ごめんだ。

「お前が俺を選んだように、俺だってお前を選んだんだよ」

今度はちゃんと指で頬に触れた。

「俺は、お前がいい」

そうだ。最初からお前のその赤に俺は突き動かされていた。

「〜〜〜っ！！！！」

ミリファの顔が朱に染まった。

「何だ、お前・・・照れてんのか？」
「バッ・・・！！そそそそんなんじゃないもーん！！！！」
そのあまりにも必死すぎる様子に、笑みが浮かぶ。おもしれーの。
「・・・っ」
「ん？」
「顔近いから！！」
首を下にさらに傾けると、ミリファから抗議の声があがった。・・・自分から抱きついてくるやつのセリフじゃねぇよな・・・。
「ほっ・・他の人のところにホイホイ行ったりしたら、許さないんだからねっ・・・！！」
「信用ねぇなぁ」

特等席（後書き）

ヴァデッドは天然たらしです（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0898x/

ミリファとヴァデッド

2011年9月28日03時11分発行